

# アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：ひゃくえむ

## 11 回目

今回のテーマ

I. スポーツアニメの変遷とひゃくえむ

II. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

III. 高校時代のトガシと小宮について考える

I. スポーツアニメの変遷とひゃくえむ

これまでのスポーツアニメと「ひゃくえむ」が異なる点は、100m 走という競技を通じて「なぜ走るのか」「なぜ生きるのか」という実存的な問いに踏み込む作品であるということである。この作品は父性の導きも母性的な抱えもない裸の個として、生きることの意味をどう掴み取るのかが問われている。

## Ⅱ. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

## Ⅲ. 高校時代のトガシと小宮について考える

子ども時代、トガシと小宮は走ることを通じてきょうだいのような関係となり、互いの存在によって走るものの質が変わり始めた。しかし小宮の突然の転校により、きょうだい葛藤に向き合う機会すらないまま関係は断ち切れ、それぞれに処理されなかった喪失が残った。

高校時代、トガシは浅草葵の抱えのもとで潜在空間を形成し、走ることが無心に没頭できる「遊び」となり、走る意味を見出し、再び速くなっていく。一方の小宮は財津に新たな父性的対象を見出し記録を伸ばし、速くなっていくが、潜在空間を持たないまま自己愛的な殻に閉じこもり孤立を深めた。インターハイの決勝、雨の中で再会した二人。トガシは小宮に敗れるが、小宮が告げたのは「走り方、変わったね」という失望の言葉であった。潜在空間の中で走ることを覚えたトガシは、小宮が追い求めていた「あのトガシ」ではなくなっていた。小宮にとってトガシに勝ったということは空虚であり、「100m を誰よりも速く走れば全部解決する」というテーゼが揺らぎ始める。そのテーゼが揺らいだのはトガシも同様であった。二人とも解決しない思いを抱えながらも陸上を続け、10 年が経過していく。

## Ⅳ. 現実逃避と潜在空間——あれから 10 年

インターハイで小宮に敗れた体験を引きずるように実業団に所属し続けるトガシ。後輩の樺木に「変わった」と告げられる——かつて小宮が失望を込めて言ったのと同じ言葉の反復である。トガシの中に埋もれていた何かに火がつくが、次の大会でも振るわず、変化を求めて海堂に会いに行く。

海堂は 15 年間財津に勝てない現実を知り尽くしながら「現実逃避は、俺自身への期待

だ」と言い切る。この言葉はウィニコットの潜在空間——現実を知り尽くした上で、現実と空想の間で創造的に生きること——を言語化したものである。しかし海堂は警告もしていた。「目を塞いで立ち止まるのと、目を見開いて逃げるのとは大きく違う」。トガシが「誰かのために走る」という理由を得たとき、海堂は走る意味を外部に置く危うさを見抜いていた。

警告は的中する。肉離れで走ること自体を奪われたとき、外部に置いた意味は機能しなくなる。公園で学童に「人生なんて賭けなくていい」と語りながら号泣するトガシ。しかしその涙こそ、まだ「本気」が死んでいない証であった。

仁神は語る。「あの一瞬のためなら、人生を棒にふれると思える」。トガシは応える。「明日生きるために死んでました。昨日までの続きを生きるくらいなら、今、全力で走れなくなります」。走れなくなるかもしれない現実と直面し、トガシは初めて目を見開く。潜在空間への再帰がここに始まる。

## V. ガチになること——極上の 10 秒

### 1) 財津と小宮の再会——世代交代と遺された言葉

日本選手権の会場で、小宮はかつての父性的対象である財津と再会する。予選を余裕で通過する小宮に対し、財津は「メンタルケアなどと言っていた頃が懐かしいね」と微笑む。かつて導く側にいた存在が、導かれた子の成長を認め、自らの退場を予感している。世代交代の構図である。

しかし財津はただ退場するのではなく、小宮にある真実を伝えようとする。記録を目標に掲げる小宮に対し、財津はそれを「哀れみ」だと告げ、絶対王者としての孤独を語った。「加速すればするほどみんなが離れていく。横をみても誰もいない」。そして辿り着いた真実——「本当の勝利、歓喜を与えてくれるのは、記録でもメダルでもない。対戦相手だけだ」。100m 走は横一線に並び一斉にスタートする。対等な者同士が共に走り競い合うからこそ生まれる歓喜。それはきょうだいトラウマを引き受けることの中にこそ真の喜びがあるということに他ならない。殺されゆく父が最後に遺す遺言であった。

しかし小宮は「僕には僕のやり方があります」と、この言葉を受け取ることができない。子ども時代から孤独の中で走り、理想化された対象を追い越すという垂直的な目標の中で自らを鍛えてきた小宮にとって、「対戦相手こそが歓喜を与える」という水平的な真

実は、体験として腑に落ちるものではなかったのである。

そして準決勝で準決勝には財津、小宮、そして海堂が同じ組に揃い戦うのである。

## 2) 準決勝——海堂の到達と小宮の衝撃

準決勝には財津、小宮、そして海堂が同じ組に揃った。実質的な決勝と言ってよい顔ぶれであった。周囲の注目は絶対王者・財津と、その王座を脅かす新鋭・小宮に集中しており、15年にわたり万年2位に甘んじてきた海堂は蚊帳の外に置かれていた。

しかし1着でゴールラインを駆け抜けたのは海堂であった。しかも日本歴代2位という驚異的な記録とともに。

この結果は、財津が小宮に遺した言葉の正しさを、走りそのもので証明するものであった。海堂は記録を目標に走ってきたのではない。15年間、財津という対戦相手の横で走り続けてきたのである。「不思議なことに、当の俺は、次こそ自分が勝つと信じきれている」と語り、「現実逃避は俺自身への期待だ」と言い切った海堂の走りは、まさに財津が言う「誰かと勝ち取って競った一位」そのものであった。勝てない現実を知り尽くしながらも、対等な相手と共に走り続ける中で潜在空間を生き続けた海堂は、記録を目指したのではなく、走り続けることの中で記録に到達したのである。

小宮はこの大会で確かに財津に勝った。エディプス的な父親殺しは成就した。しかし小宮が人生のすべてを賭けて追い求めてきた「偉大な記録」は、自らの手ではなく、海堂という——小宮から見れば執念だけの人間に——奪い取られた。「確率と計算、傾向と対策、その先にある偉大な記録」という小宮の方法論が、記録ではなく対戦相手と走り続けることの中で鍛え抜かれた海堂の走りに凌駕されたのである。

小宮にとってこの衝撃は、単なるレース結果以上の意味を持っていたのではないだろうか。財津が「哀れみだよ」と言い、「横をみても誰もいない。そこから見える景色は最下位のそれと同じだ」と語った言葉。あの時受け取ることでできなかった真実が、準決勝の結果として目の前に突きつけられたのである。海堂が15年間の万年2位の中で培ったもの——走り続けることの意味、対等な相手と共にあることの歓喜——それは、孤独の中で記録と計算に閉じこもってきた小宮には、理解の及ばない世界であったと考えられる。

父性的対象である財津を倒し、しかしきょうだいとして共に走ることを意味を持たぬまま、小宮は決勝へと向かう。そこで小宮が会うのが、トガシであった。

## 3) トガシと小宮——「ガチになること」

決勝を前に、トガシと小宮は10年ぶりに言葉を交わす。「また久しぶりだね」「インハ

イから 10 年、やっと君とここで走ることができる」。トガシの「やっと」という言葉には、この 10 年間の重みが凝縮されている。走る意味を見失い、「明日生きるために死んでいた」10 年を経て、肉離れを抱えながらもここに立っている。かつて小宮に敗れ、「走り方、変わったね」と失望された存在が、再び同じスタートラインに立つために戻ってきたのである。

しかしこの再会場で、先に心を開いたのは小宮の方であった。「毎日、毎日この距離を繰り返すことのむなしさを考えたことないかい」。記録だけを追い求めてきた 10 年間。確率と計算、傾向と対策。しかしたった今、記録など気にしない人間に記録で負けた。

「もしまた僕が記録を塗り替えたとして、その先に何があるんだろう」「僕らは一体何のために走ってるんだ」。

これは小宮にとって、自己愛的な殻の崩壊の瞬間である。Ⅲ章で描いたように、小宮は抱えのないまま自己愛的な殻の中に閉じこもり、記録と計算の世界に自足することで走り続ける理由を自ら作り出してきた。しかし準決勝で海堂に敗れたことで、その殻が内側から砕かれた。記録を磨くということを生きがいにしてきた小宮にとって、執念だけで走る海堂に記録で凌駕されたことは、走ることを根底から覆される体験であったと考えられる。傷つき、混乱し、どうすればいいのかわからない。その剥き出しの問いをトガシにぶつけたのである。

小宮がこの問いをトガシに向けることができたのには理由がある。トガシは子ども時代の小宮にとって理想化された父性的対象であり、「100m を誰よりも速く走れば全部解決する」というテーゼを与えた存在であった。その後、インターハイで小宮はトガシを追い越した。父親殺しは成就し、しかし勝利は空虚であった。いわばトガシは小宮によって乗り越えられた、殺された父親的对象であった。しかしそのトガシが、さまざまな苦悩を経て、「やっとここで走ることができる」と言って再びここに立っている。倒された存在が復活し、今度は対等な存在として小宮の前に現れた。小宮はそこに畏敬の念を感じたのではないだろうか。かつての父性的対象が、もはや見上げる存在でも乗り越える存在でもなく、同じ地平に立つ一人の走者として自分と向き合っている。であるがゆえに、小宮は走る意味の喪失という最も脆弱な部分を、率直にぶつけることができたのだと考えられる。

トガシの答えは明快であった。「そんなの当然『ガチになるため』。それ以外要らない」。

そしてトガシは自らの遍歴を語る。負けることや孤独を恐れたこと。負けないと開き直ったこと。敗北から目を逸らしたこと。「誰かが見てくれている」という妙な信仰に走ったこと。これはⅣ章で描いた、「誰かのために走る」という外部に意味を置いた走りのこ

とであり、海堂が「目を塞いで立ち止まる」と警告したものに他ならない。トガシ自身がそのすべてを経験し、すべてにおいて行き詰まり、そのおかげでようやく辿り着いた場所がある。

トガシが辿り着いたのは、徹底的な孤独の自覚であった。「人間は自分の心以外は理解できないし、誰にもどこにも居場所なんてない、連帯も共感も愛情もすべてこっちの思い込みだ」。これは一見するとニヒリズムのように聞こえる。しかしトガシはそこに留まらない。「そんなものには、俺たちが本気で、本気でいることの幸福感を1ミリも奪えない」。現実のすべてが不安にさせ、最後にはみんな死ぬ。それでもなお、本気であることの中に生まれる幸福感は何ものにも奪えない。これはまさに海堂が語った「現実逃避は俺自身への期待だ」の別の表現であり、ウィニコットの潜在空間の体験——現実を知り尽くした上で、なお現実と空想の間にある第三の領域で創造的に生きること——の、トガシ自身の言葉による到達である。

しかし小宮は「そんな景色みたこともない、味わった覚えもない」と返す。小宮にはこの体験がない。子ども時代から孤独の中で走り、高校時代には記録と計算に閉じこもり、潜在空間に触れることなく研ぎ澄まされてきた小宮には、「本気であることの幸福感」という体験そのものがないのである。

ここでトガシは、二人の原点に立ち返る。「小宮くん、忘れてるみたいだけど、この世にはシンプルなルールがあったはずだ。それによると、100メートルを誰よりも速く走れば、全部解決する」。これは子ども時代にトガシが小宮に語ったあのテーゼである。しかしあの時、この言葉は父性的な導きとして上から手渡された。今、同じ言葉が、対等な存在として横から差し出されている。同じ言葉でありながら、その意味は根本的に変わっている。

「君が見つけて、君が目指して、そして君が磨いてきたその速さを、君は虚しいと思うのか。本気で走れば、すべて吹き飛ぶ。研ぎ澄まされた世界はすべてきらめく。そういう景色を見てきてないなら、この100メートルだけは、そういう景色を見ようぜ」。

トガシが小宮に伝えようとしているのは、財津が遺言として語ったことと本質的に同じものである。100m走という母の法のフィールドで、対等な者同士が共に走る中でこそ生まれる歓喜。しかし財津の言葉が小宮に届かなかったのは、それがなお父性的対象からの言葉であったからではないだろうか。財津は絶対王者という高みから語った。しかしトガシは違う。小宮に一度倒され、走る意味を見失い、「明日生きるために死んでいた」時間を経て、ようやくここに帰ってきた存在である。かつてのきょうだいが、長い時を経て再び横一線に並ぼうとしている。「この100メートルだけは、そういう景色を見ようぜ」と

いう誘いは、父性的な導きではなく、共に走ろうというきょうだいからの呼びかけなのである。

そして財津は記者会見の場で引退を表明し、決勝の走者たちにこう告げた。「希望、失望、栄光、挫折、疲労、満足、焦燥、達成、そして喜怒哀楽。すべてを 100 メートルに詰め込んで、極上の 10 秒を味わってください」。財津の言葉は、100m 走というわずか 10 秒余りの時間が、人生のすべてを凝縮しうる濃密な体験の場であることを語っている。それはまさに潜在空間の体験の本質であり、トガシが小宮に「ガチになること」として伝えようとしたものと響き合っている。

そしてトガシ、小宮、海堂、樺木は、それぞれの想いを胸に決勝を迎える。